

鼎談

「子ども・戦争・歴史」

本田 和子（お茶の水女子大学元学長）

著書：『それでも子どもは減っていく』（筑摩書房、2009）
『異文化としての子ども』（紀伊國屋書店、1982） 他

宮澤 康人（東京大学名誉教授）

著書：『〈教育関係〉の歴史人類学——タテ・ヨコ・ナナメの
世代間文化の変容』（学文社、2011）
『大人と子供の関係史序説——教育学と歴史的方法』
（柏書房、1998） 他

山本 秀行（こども教育宝仙大学学長）

著書：『ナチズムの時代』（山川出版社、1998）
『ナチズムの記憶——日常生活からみた第三帝国』
（山川出版社、1995） 他

2014年**11月21**日（金） 13:20～14:50

お茶の水女子大学 共通講義棟2号館2階201室

（東京メトロ丸ノ内線 茗荷谷駅 徒歩7分／有楽町線 護国寺駅 徒歩8分）

一般公開・事前申込不要

お問い合わせ：nyuyoji-info@cc.ocha.ac.jp（ECCELL事務局）

定員：300名

共催：文部科学省特別経費「乳幼児教育を基盤とした生涯学習モデルの構築〈ECCELL〉」

科研費基盤研究(C)「20世紀前半のドイツにおける幼児教育の制度化と家族に関する社会史的研究」

後援：幼児教育史学会

歴史の中で、子どもたちは必ずしも主人公ではなかったように思います。例えば、私たちが学んできた歴史教科書をみてみましょう。すると、400ページ近くある歴史教科書の中に、ほんのわずかに点在する子どもの姿をようやく見つけることができる、というような状況ではないでしょうか。しかし実際には、子どもたちは、いつの時代にも、生まれ、生活し、そして大人になっていきました。大人たちは、子どもたちを見守り、育ててきました。歴史の主人公ではなかったけれども、歴史の中で確かに生きてきた子どもたちのことをあらためて考えてみたいと思ったのが、この鼎談のきっかけです。

今回のテーマは、「子ども・戦争・歴史」という三題話です。歴史の中の子どもたちについてどういった視点から議論できるのだろうか、と考え、今回は戦争という言葉、キーワードの一つにしてみました。戦争というキーワードを考えたのは、今年が1914年からちょうど100年目に当たるというのがその理由の一つです。100年前の1914年6月にセルビアでオーストリア＝ハンガリーの皇太子夫妻が殺害されるという事件がおこり、それをきっかけに次から次にヨーロッパ列強が戦線に突入していきました。そして、半年も経たないうちに、ヨーロッパ全土をまきこんだ第一次世界大戦となり、そののち、第二次世界大戦が勃発することになります。現代社会のキーワードであるグローバル社会は、皮肉なことに戦争という形で目に見えるものとなり、もちろん日本もまた例外ではありませんでした。

この第一次世界大戦と第二次世界大戦の間に、ドイツの芸術家ケーテ・コルビッツが一枚の子どもの絵を描いています（「ドイツの子どもたちは飢えている！」1923年）。とても子どもらしい瞳を持った子どもたちですが、私たちのなじみのある子どものイメージからかけ離れた子どものような気がします。しかし同時に、彼らの瞳から目をそらすことはできないようにも思うのです。

現在、戦争の記憶が遠いものとなっていくなかで、だからこそ、今、戦争と子どもというテーマは重要性を持つようにも思います。戦争の時代に子どもたちはどう生きたのか、そして、今、私たちは何を考えることが求められるのか、三人の先生方のお話をお聞きしたいと考えました。

（文責 お茶の水女子大学教授 小玉亮子）